

姫月に重ねて

(平成二十六年 degree 寮歌)

松元一平君 作歌
寺尾佳隆君 作曲

観月^{かんげつ}過ぎゆく晩秋^{ばんしゅう}の夜^{よる}、穹蒼^{そうちゅう}の天空^{そら}高く舞^まひたる月^{つき}は今宵^{こよい}満^みつるかな。
その清輝^{かがやき}に映^はえし姫^{ひめ}が鏡水^{かがみず}は、鹿^わが純瞳^{ひとみ}に宿^{やど}らむ。
月影^{つきかげ}は鹿^{われ}を誘^{さそ}ひ来^きたりしこの神無月^{とつき}に何^{なに}をば見^みせむ。

一

時移^{ときうつ}ろひて人世^よは変^かわれども
今宵^{こよい}も満月^{つき}は我^{われ}ら^を照^うさむ
夜の邪帳^{とばり}をはらはむと
流歩^{あゆ}む汝^{なんじ}は楡^{にれ}に似^にたれど
風流^{かぜ}を掴^{つか}まむ芽^めに感^{かん}ず
風習^{ふうしゅう}に付和^{ふわ}せし
狗^くと成^ならざらめや
さて映^{うつ}りこむ我^わが鏡瞳^{まなざし}に
風習^{ふうしゅう}だに愛^めづるその気概^{おもひ}

二

清澄^すみたる想^{おも}ひ知^しる由^{よし}もなく
今宵^{こよい}の三日^つ月は川面^{かわも}に映^{うつ}らむ
かの日^ひの月影^{かげ}とは違^{ちが}へども
人世^よに充^みつ解答^{かいとう}を自^{おの}ずと心得^{こころえ}
此^これは汝^{なんじ}の求^{もと}望^{ぼう}にか
漲^{みなぎ}る想^{おも}ひなどか劣^{おと}らむ
さて映^{うつ}りこむ我^わが鏡瞳^{まなざし}に
身^みを委^{ゆた}ねばやその清流^{ながれ}

三

静^{せい}と唸^{うな}りし雨霽^{あめ}したたれば
今宵^{こよい}も我^{われ}は臙月^{つき}を仰^{あお}がむ
姫^{ひめ}が麗姿^{すがた}を追憶^{おぼえ}ふべく
汝^{なんじ}が想^{おも}ひは涙^{なみだ}と落流^{なが}れ
透^すかし斜光^{ひかり}にさらさるる
閉^とじなむ凌雲^{りょううん}よこひ願^{ねが}はくば
さて映^{うつ}りこむ我^わが鏡瞳^{まなざし}に
嗚呼^{ああ}汲^ひまれたしその厭^{いと}心^{こころ}
悲^{かな}しかりけむ晩秋^{あき}の夜^よは
月影^{つきかげ}映^はえて人影^{かげ}も追^おひ得^えじ